

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：外国語第 I 教育部会

部会長名：野谷啓二

作成者名：野谷啓二

概要（2000 字）

昨年度外国語第 1 教育部会は外部評価を受け、A4 版両面印刷で 300 ページを超える報告書をまとめた。23 年度は、自己評価とともに委員各位から与えられた評価を部会と授業の運営に活かしていく初年度として意義づけられた。

1. 実施体制について

平成 23 年 4 月に外国語第 I 教育部会に所属する教員は、人文学研究科 1 名、国際文化学研究科 19 名、国際コミュニケーションセンター 11 名、海事科学研究科 1 名の計 32 名であった。うち英語のネイティブスピーカーである特任教授・准教授は 5 名である。一昨年度末で、人文学研究科の日本人専任教員が担当からはずれたため、特任 1 名をのぞくと、専任教員は、国際文化学研究科と国際コミュニケーションセンターの 2 部局のみの構成となっている。非常勤講師は 38 名であり、合計 70 名体制で、総計 366 コマの授業を実施した。専任・特任と非常勤の担当コマの割合は 57.7%対 42.3%であった。専任教員の定年補充が他科目で行われることなどにより、非常勤依存率が上昇傾向にあること、専任の特定部局への集中は、全学レベルで根本的対策が急がれる問題である。

部会の運営は部会長 1 名と幹事 3 名によって行われている。さらに部会運営を補佐する 3 名の委員が選任されている。今年度はほぼ毎月、部会会議とそれに先立つ幹事会を開催した。部会長および幹事は、選挙規約にもとづき、毎年選挙により選出し、委員は部会名簿によるローテーション制で選出している。

また組織上の課題として以下のことがあげられる。全学の共通外国語教育（英語）の運営・実施母体として、全学共通教育部のなかに①外国語第一（英語）教育部会がある一方、②全学の外国語教育を統括するヘッドクォーターとして全学共通教育部とは独立した部局の国際コミュニケーションセンター（SOLAC）が設置されている。①②の両組織の関係が神戸大学の英語教育により寄与できるものとなるよう検討を行う必要がある。

上記の問題を解決するための一歩として、来年度から部会長と幹事をすべて SOLAC の専任教員から選出することとした。

2. 開講科目・実施状況について

2-1. カリキュラム

ベーシックコースは、平成 18 年度に大幅な改正を行い、リーディング群 I,II,III とオーラル群 I,II,III に大別して実施している。科目別の教授内容・到達目標について大方の共通認識が形成されている。昨年度の報告書にも記載のあった、新たな非常勤講師採用を採用する際には、学生の希望に応えるために努めてネイティブ教員の採用をするという方針をとり、結果として 2 名のネイティブ教員を採用することができた。

2-2. 特別編成クラス：オーラル II として 1 年次後期に一定レベル以上の受講生を対象に開講されているネイティブ教員担当の少人数限定の特別編成クラスは、本年度 9 クラスを開講し、熱意ある学生の期待に応えることができた。

2-3. アドバンスト科目

平成 19 年度から、国際コミュニケーションセンターの英語教員が担当する「英語アドバンスト科目」を設置している。これはベーシックコースに積み上げる科目群である。英語文化・コミュニケーション英語・応用英語の 3 領域にわたって、高度な英語運用能力を育成する上級年次生用の

授業である。本年度は 11 コマを開講した。学生アンケートからも分かるが、非常に好評である。

2-4. 特別単位認定制度

1年次に TOEIC の「リーディングセクション」において350点以上の点数を取得した学生に対し 2 年次前期開講科目である「リーディングⅢ」を、「リスニングセクション」において350点以上を取得した学生に対し「オーラルⅢ」を「優」の成績で認定している。本年度は、「リーディングⅢ」が 181 名、「オーラルⅢ」が 181 名で、認定単位数で見れば、昨年度の 297 単位から 362 単位と大幅に増加した。

また、1年次においてアメリカ合衆国またはオーストラリアの大学で3週間の海外語学研修を修めた学生にも、研修の成績に応じてオーラルⅢの1単位を認定している。本年度はアメリカ合衆国のワシントン大学で研修を行い、単位認定者は 9 名であった。

3. 活動の状況(授業実施にあたっての工夫や問題点)

3-1. 外国語オリエンテーションは、一昨年度より外国語授業の第一週目に第Ⅰ・第Ⅱ外国語それぞれの教室で担当教員が行うことになり、3 月 5 日に、担当教員のためのガイダンスが実施された。分科会として非常勤講師を含む英語部会構成員全体のためのガイダンスを実施した。一堂に顔をあわす機会がないので、有意義な意見交換ができた。反省点としては部会独自の FD を実施出来なかったことがあげられる。

3-2. シラバスの改善

新しい教務システムの導入にあわせ、昨年度より実施してきた担当者全員にシラバス記入を義務づける制度をさらに徹底させた。評価方法については、単位の実質化に配慮し、複数の評価要素を組み合わせ、それぞれの割合をできるかぎり明確に数値で記入するように指導した。記入されたシラバスについては、部会長・幹事ですべて点検し、担当教員全員に、問題点を指摘した。今後は部会の基準をより明確化する努力が必要ではないかと、幹事会は認識している。部会によるシラバス点検は来年度以降も継続する。

3-3. ピア・レビュー

23 年度の共通教育のピア・レビューの対象として当部会は後期に石川慎一郎准教授の授業が公開された。部会長、幹事が参観した。今年度は残念ながら部会内のピア・レビューは行われなかった。

3-4. クラスサイズ

一昨年度医学部医学科が定員増により 1 クラス人数が 50 名を超える事態となったため、オーラル担当の教員からインタラクティブな発話の授業が著しく困難との苦情があり、また LL/CALL 教室の収容も困難となった。昨年度のクラス編成において医学科に 1 クラス(通年で 4 コマ)増が認められたので、定員ベースで 30 人台にまで改善された。しかし、全体的に英語ベーシック科目は外国語第Ⅱ科目に比して、依然としてクラスサイズが大きく、授業運営の障害となっている。

3-5. 教室環境

一般教室、CALL 室ともに環境としてはかなり改善された。英語オーラルの授業を全て CALL 室に割り当てる措置が可能となり、履修する全学生にマルチメディアに対応した外国語学習環境を提供することが可能となった。またリーディングで使用する一般教室にも大型プロジェクター、AV 機器、LAN などが標準で設備され、かなり高度なマルチメディアの使用が可能となった。しかし、CALL 室を利用する教員や学生をサポートする補佐スタッフが教室数に対して不足している状況であり、改善が望まれる。

様式 2 (続き)

項目・観点ごとの記述

基準 5 教育内容及び方法

5-1-②: 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

(観点に係る状況) カリキュラム全体に関しては、平成18年度に大幅な改正を行ない、リーディング群 I,II,III とオーラル群 I,II,III に大別し、その上にアドヴァンスコースを積み上げる方式を採用して、6年目を迎えた。今後は神戸大学教育憲章の教育目的を具現化するために議論を積み重ね、常にカリキュラムが適切であるか点検を続けていく必要がある。

根拠資料

神戸大学教育憲章、シラバス、学則、
国際コミュニケーションセンター作成パンフレット

5-1-③: 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

(観点に係る状況) シラバスおよび教科書により、教員の研究が授業内容に反映されているかどうかを知ることができる。部会構成員の学問的背景が幅広いことから、扱うテキストや内容の多様性に貢献している。

根拠資料

シラバス、教科書リスト

5-1-⑤: 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況) 多くの教員が、予習を義務づけ、出席を確認し、授業中のレスポンス、小テスト、レポートなどを評価に組み込んでいる。また、オンライン教材を自宅学習の課題として活用している場合もある。

根拠資料

シラバス、出席簿、小テスト答案、提出レポート、CALL 教室のログ・オンライン教材の利用記録

5-2-①: 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。(例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。)

(観点に係る状況) 冒頭にも記したが、平成22年度に、英語部会は外部評価を受けた。それから得られたさまざまな知見を生かし、また年度末に実施される外国語オリエンテーションを通して、さらなるFDに努めたい。

特別編成クラスにおいては、ネイティブ教員による少人数(10-20名程度)クラスが実現しているが、ベーシック全体としてはクラス規模が大きすぎるのが、対話・討論型授業などの適切な授業形態、授業方法を導入する大きな障害となっている。そうしたなかでも、CALL 教室や TA などのリソ

ースが割り当てられたクラスでは、よりインタラクティブな、あるいは、多様なメディアを高度に利用し、情報機器を活用した授業が行われている。

根拠資料

外部評価報告書、シラバス、CALL 教室利用記録、オンライン教材の利用者記録

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

（観点に係る状況）再履修専用クラスを水曜5限に2クラス開講した。また、個々の学生のニーズに応じ、ハブ室、CALL室、オンライン教材の利用を推奨している。

根拠資料

ハブ室利用者名簿・ハブ室教員・留学生勤務表
国際コミュニケーションセンター・パンフレット
オンライン教材の利用記録

5-3-②： 成績評価基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

（観点に係る状況）昨年度から継続し、非常勤も含め、部会教員全員に成績評価の基準をシラバスに明示するように要請している。入力されたシラバスを部会長、幹事で点検し、不明確、不適切な場合は、修正を要求した。また、評価基準については、単位実質化を図るために、出席、授業の予習・復習を評価の項目に入れ、それらを数値により明示するように要請した。

根拠資料

出席簿、期末試験答案、小テスト答案、シラバス、各教員の自己点検・報告書

基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。

（観点に係る状況）各教員とも、学生からの評価・意見を、各自授業方法の改善のための参考にしている。ただし少数ではある次のような感想を持つ教員もいるので紹介しておきたい。「アメリカの大学での授業評価には、学生の授業へのコミットメント度というのが、出席率以外にも、複数の質問がありましたが、日本の（少なくとも）私の担当している三つの大学では、有益な質問項目がなく、教員にとっては不公平な感がいなめませんが、それはひとえに私の教員としての魅力のなさゆえでしょうか。」

根拠資料

学生による授業評価、学生による授業評価の集計表、シラバス、各教員の自己点検・報告書

基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言（例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。

（観点に係る状況）専任教員については、シラバスにオフィスアワーを明記するように要請し、メールによる相談にも対応している。非常勤講師については、勤務日の非常勤講師控え室での対応またはメールによる対応などをお願いしている。また、国際コミュニケーションセンターは、英語支援プログラム KALCS を実施中である。

根拠資料

シラバス、国際コミュニケーションセンターHP、国際コミュニケーションセンター・パンフレット
ハブ室利用者名簿・教員・留学生勤務表等